

Newsletter

Sept. 2003

http://www.aack.or.jp

目次

●新会長あいさつ A14 AACKのこれから 木村 雅昭……………1	●言わせてくれエ——反論 B2 本多論文に反論する 北村 泰一……………3	●特集 AACKのゆくべき道 A15 パイオニアのゆく道 梅棹忠夫……………5	A16 ノシャックとその後 酒井 敏明……………6	A17 AACKは進化しよう 北村 泰一……………9	●特集 言いたい放題——批判 B3 これだよいかAACK・その2 北村 泰一……………12	●特集 若者を集めよう C1 若者を集めよう AACK・ 山岳部共催の中学生向け講演会 松井 敦男……………16	C2 若者を集めよう AACKを 少しでも知ってもらう 北村 泰一、松林 公蔵……………17	●特別寄稿 日本山岳会入会当時のお思いで 芳賀 芳郎……………18	●回想の山々 チョゴリザその後―登られているか― 平井 一正……………20	知床初縦走50周年講演会 中島 道郎……………22	知床50年 廣瀬 幸治……………23	●理事会 理事会・総会報告……………24	●お知らせ 第2回南極半島ツアー 北村 泰一……………25	●編集後記……………26
--	---	---	------------------------------	-------------------------------	---	---	--	---	---	------------------------------	-----------------------	-------------------------	-------------------------------------	--------------

《編集者注》

次の文は木村新会長の挨拶文である。しかし、内容は本誌の特集『AACKの行くべき道』に関係するところが多いため、これを普通の挨拶文とせず、特集文の中に分類して「A14」とした。Aシリーズとは、『AACKの行くべき道』、「B」シリーズは「A」シリーズやAACKそのものに対する反論や賛成文や批判文である。そして、今号から新たに「C」シリーズをつくり、これを『若者を集めよう』シリーズとして、若者を集めるアイデアに関する投稿文をこの中に分類することにした。どんどんアイデアを投稿して戴きたい。

新会長挨拶

A14 AACKのこれから

木村 雅昭 (法 一九六六卒)

五月に開催された総会で会長をやれと仰せつかり、不適ながら会長に就任しました。かといってとくに高邁な抱負があるわけではありませぬ。わたし自身AACKの遠征隊の

メンバーになったことはありませんし、それにこの二、三年は大学のほうが忙しく、AACKをとりまく最近の状況もあまりよく知りません。しかしわたしが山岳部に入った一九六一年の翌年にはサルトロ・カンリが登られ、その次にどこをやるかとAACKの若手の間で熱っぽく語られていたことは、今でも覚えております。候補として、たしかガッシュアルム三峰もあがっていたと記憶しておりますが、結局ヤルンカンにおちつきました。この遠征隊には私も参加しなかったのですが、結局勤めの関係で実現せず、わずかに許可取り付け交渉にカトマンズにでかけたものの、結局うまくいきませんでした。その後、カンペンチン、ナムナニと遠征が続きましたが、たいしたお手伝いもできず、また梅里雪山についてもわずかに一九九六年度の遠征隊のお手伝いをしただけで、なにほどのこともできませんでした。こういう人間が、AACKの会長として不適なのは自分自身承知しており、固辞したのですが、結局こういうことになってしまったわけです。それでも送られてくるニュース・レターには、折にふれて目をおしております。AACKの将来をめぐって紙面で展開されていた様々な

議論はそれなりにおもしろく拝読させていただきましたが、こういうことになる、面白いという傍観者の立場がゆるされなくなっただけは事実です。そんなことを漠然と考えているときにニューズ・レターの編集責任者の北村さんからなにか書けという依頼をうけ、会員諸兄のお叱りを覚悟の上で、あえて一文を寄せた次第です。

AACKが大きな曲がり角にたっていること、それどころか存亡の危機にたっていることは何人も認めることです。AACKはこれまで初登峰主義をかかげてまいりましたが、かんじんかなめの未踏峰、少なくとも会の総力を結集してやるに足るだけの未踏峰がなくなってしまう。AACKがおかれている状況の根本原因は、実にこの単純な事実に戻着します。もちろんまだ梅里雪山は、重い宿題としてのしかかかっておりますが、現地の観光地化が急ピッチで進む今日、この問題は複雑です。それにこの山を登る若手クライマーを、かき集めることができるのかという点もあり、早急に結論を出すことは困難だろうとも思います。この問題に関しては、これから会員皆様の意見を聞きつつおいおい詰めてゆくこととして、いまはもう少し一般的な問題について論じてみたいと思います。実は会長を引き受けざるを得なくなっただけで、『大興安嶺探検記』を読み返し、今西さんを中心とした当時の若手のエネルギーに圧倒されました。次々と計画が登場し、その実

現にむけて個人が、さらにAACKが果敢に取り組んでゆく。それはまことに壮大なドラマの一端を垣間見るようで、読み進んでゆくうちに、私自身おもわず襟をただしました。その時代の最終目標はもちろんヒマラヤにありましたが、しかし「時局我に利あらず」というわけでポナペ島に、さらにはアジア大陸の地図の空白部へと、われらが先人達は勇躍出かけて行き、立派な仕事をなされたわけです。

もちろん衛星写真が手に入る現在、地図の空白部は存在いたしません。また垂直から水平へと転進された当時であっても、究極の目標はヒマラヤにありました。しかし、戦後のAACKは、再び水平から垂直へと、舵をきり直し、輝かしい実績を収めてきたのは事実としても、ここで再び水平への転進、あるいは水平を視野に入れて考えるのも一考かと思えます。もちろん調査といっても大興安嶺の時代と今とは、調査の密度が質的に異なってしまう、自然あるいは人文・社会調査で学問的な業績をあげるには、それ相応のトレーニングが必要です。とくに人文・社会の分野では定住観察が不可欠です。でありますからAACKが「探検隊」を組織したところで、学問的にはたいした業績を挙げることはできないかもしれません。しかしそれはそれで一向にかまわないのではないかと思っております。むしろわたし自身AACKは、あくまでもアマチュアリズムに徹するべきだとさえ思っております。アマチュアというのは、徒

手空拳で対象に飛び込んでゆくゆえに、自分の想像もつかないような現実に直面して驚きます。それに対して専門家は未知の事実を直面すると、なんとかして既存の知的枠組に取り込みその中で考えてしまいます。ところでこの「驚く」ということこそが、あらゆる知的活動の原点となるものであることはたしかギリシアの哲学者たちが強調しております。隊に参加した者は、このときの「驚き」を大切にし、それを後の生活、職業のなかで生かしてゆく。いうならば知的活動の原点ともいべき場をAACKが提供する。AACKの役割はこのようなものであるべきなのではないか。このようにも思うわけです。

大興安嶺探検に参加された人達は、その後、それぞれの分野で第一級の仕事をされました。私自身、これらの先輩にとっても及ばませんが、それでも山岳部の遠征隊の一員としてネパールのガネッシュに出かけたのを機縁として、いまだに南アジアは私の研究対象の一つです。もちろんAACKの会員の多くは実社会で活躍しておられます。自分が身を置く以外の社会については確たることはいえませんが、そういう人達にとっても遠征隊で得た経験は大変大きいものがあつたに違いありません。人生そのものが日々未知のものに直面してゆく過程であるとするならば、遠征での経験はそれこそあらゆる場面で生かされただろうと思っております。

もちろん水平への転換といっても垂直への憧れはわれわれ会員すべてが共有するところ

です。したがって「探検」の途中で山に登るのは一向にかまいませんし、こうした計画が立案されるとして、登山もその活動の内に入ってくるでしょう。ただ、こうした遠征隊に對しては、社会の淨財を期待しえませぬし、また期待すべきでもありません。また会の總力を挙げて、ということも考えられませぬ。おのずから隊の規模は小さくなるでしょうし、会全体と遠征隊の關係もこれまでとはちがったものになるでしょう。しかし戦後のAACKの遠征隊、つまり会の總力をあげて未踏の高峰に挑むという時代はもはや過ぎ去ったことを、わたしたちははっきりと認識すべきではないでしょうか。

わたしたちの若い頃には「山日記」といのがあり、山行のときに持参したものです。そこでカンチエンジュンガ隊を率いたエヴァンスが、ヒマラヤもアルプスもよいが、それにも増して自分の心をひきつけるのはスコットランド、ウェールズの山並だ、これらの山々を歩き回って夕方にどこかで一夜をあかす、これはなにも増して自分の憧れを掻き立てるといった言葉を書いていたのが不思議に今でも頭に残っています。ここに旅人の原点があるような気がしてなりません。もちろんAACKは海外遠征のために設立された団体です。エヴァンス流をそのまま実践することとはできませんが、こういう精神に立ちかえることも一つの道ではないかと思えます。それはこれまでAACKの輝かしい伝統を考えれば一歩も二歩も後退と受け止められるかも

しれませんが、そんなことは二の次ぎです。

最後に一言。私が山岳部にいた頃には、AACKの若手と現役の山岳部員との間には、密接な關係がありました。もちろんそこにはロッククライミングをやらせたなら、自分たちも負けないぞというライヴァル意識もありましたが、AACKの若手の方から、随分と多くのことを学びとりました。今では山岳部員の数もうんと減つてしまひ、またAACKの若手も老齡化しましたので、昔と同列に論じることができませんが、それでも山岳部との關係を今一度見直す必要があります。もしも山岳部の中に遠征の氣運が出てきたならば、それに対して暖かく援助の手を差し伸べる。結局、山に登るにしても、探検に出かけるにしても、その主体は若い人達なので、山岳部との關係は大切にしなければなりません。先輩諸兄、後輩諸兄のお叱りを覚悟の上であえて駄弁を弄しました。

言わせてくれエ——反論——

B2 本多勝一氏の論文(ニユースレター#26・27合併号A12)に反論する

北村 泰一(理地球物理 一九五四卒)

本多勝一氏は、先月号(二〇〇三年、#26、27合併号)で、『A12 五十年前ちかく前にす

んだ議論では?』というタイトルで、このニユースレターが現在特集している「AACKの今後の道」というテーマは、五十年前(本多氏の学生時代)に(議論が)すんでいるから、今更私には興味ない……、という一文を寄せた。

これはなかなか辛辣な意見である。このところ、ニユースレターの編集は北村泰一らがやっている。私も本多氏と同世代だ。この「AACKの道」というテーマは、過去にも何回か座談会やこのニユースレター誌上でも議論されてきた。しかし、こんなテーマは一度で結論が出るわけではない。AACKにどうしても、これは死活の問題なので、結論が出るまで何度もくり返し議論をおこなう必要がある。

だから、今回も特集をくんでいる。それを、そんなこと五十年前にすんでいる、興味がない……と言われている、編集者として黙っているわけにはゆかない。

そこで、私もちよつと言わせて貰おう。以下は本多氏の論調に対する反論である。

と反論しようと思つて書き始めたが、もう一度よく本多氏の昔の論文を読んでみると、少し論点が違うようだ。

本多氏が『そんなのは五十年前にすんだ。興味ない……』というその本多氏の論文の趣旨は、われわれの世代は、当時のルームノーツ(部員が思うことを書きしるすためのノート)やその後の本多氏の出版物により覚えて

いる人が多いだろうが、なにしろ五十年前のこと、若い世代にとつては内容を知らないほうが普通である。そこで、本多氏の議論のサワリだけを述べて読者の参考としたい。

今手元にあるのは本多著『パイオニア・ワークとは何か』（旅立ちの記（私家本一九八二年））である。長い文章であるので、そのレジメを述べることは困難であるが、私の捉え方はこうである（この他に京大山岳部報告第五号（一九五五）、本多著作集第二巻『旅立ちの記』朝日新聞社（一九九三）にもあるという）。

八千mの巨峰が次々と落ちていった当時（二九五〇年代後半〜六〇年代）、初登攀をかかげる限り、より低い山に「パイオニア・ワーク」を求めざるを得なくなる時代がくることは必定である（現在がそうである）。そうした小さい対象であってもパイオニア・ワークと言うのか。我々の求めるパイオニア・ワークとは、もっと別なものではないか、ということ論じてある。何でも初登攀だけがパイオニア・ワークではない、と論じている。

氏の論文では「AACKの将来ゆく道は何か」ということまでには触れていない（ように思う）。

今回の本多氏が「そんなこと、五十年まえにすんだことでは？」という論文（先月号）の趣旨が、噛みあわないというのはこの点である。

このニュースレターで追求しているのは、「パイオニア・ワークとは何か」ではない。

創立以来、AACKはパイオニア・ワークを追求してきた。そして、二十世紀の間では、それはそれなりの成果をあげてきた。その方針を堅持しつつ、「二十一世紀にも生き残るためにはどうしたらよいだろうか」を追求しているのである。

これが明白にならないと、AACKは過去の栄光に酔うだけの、そして、あとは枯死を待つだけの山岳会に落ちてしまう、という気持ち（危機感）からである。

反論はこれで終わるが、氏の文の中に気になる箇所があった。今後の私の文展開に関係があるので、ここでそれを指摘しておきたい。それは、

『月や火星の山は、岳人とは全く無関係だよ。これは科学の対象だ。科学にパイオニア・ワークを求める連中の世界だ。科学男たちがお膳立てしたロケットなどに山男が便乗していつて、お月様の処女峰にかじりついている図なんか漫画でしかない』

というくだりである。これは、パイオニア・ワークを追求する登山者という立場では、文字の上では惑星における行動を否定しているが、著者は（本多氏）「宇宙探検」を視野に入れている。

こうした考えは、本多氏だけでなく、AACKの友人A氏にもB氏にもあった。

『ワシは宇宙服を着るのなんて御免だよ……』

『いくら高くても、火星の山（オリンポス

山（二万九千m）に登る気はない』……と、こぞって現在の山の登り方に固執した。『新しい道』に踏み込むためには、古い考えから脱した発想の転換なるものが必要である。このことは、私がこれから詳細に述べる積もりなので、ここではこれだけにしておこう。

ただ、私がこう質問したら、貴君はどう答えるかを聞きたい。

ロケットに乗るのに抵抗があるなら、ヒマラヤへゆくのには、近くの空港まで〇〇航空を利用するのはどういう訳か。南極の昭和基地へゆくのには、「宗谷」や「しらせ」（現在の砕氷艦）に乗ってゆくのはどういう理由か。これらを使用する時には、何の抵抗感もない。

月面で宇宙服を着るのがいやなら、何故、ヒマラヤの高峰で、当然のようにして酸素マスクをつけるのだろうか。

南極で犬ぞり（現在は使わない）や雪上車を使うのには何の抵抗感がなくて、何故、月面車に乗ることに抵抗があるのだろうか。

これらのことは、次のように考えると理解できる。人間の好む好まないの判断は絶対的なものでなく、すべてを相対的に判断するものだ。従来の習慣から判断するのだと。

現在なら、穂高へゆくのには、徳本（トクゴウ）峠を歩いてゆく人はない。徳本峠そのものが目的でないなら、普通、バスなどの交通機関を使う。

しかし、バスなどが開通した当時、そんなバスを利用することに抵抗感をいだいて峠を

通って徳沢まで歩いて行った「岳人」がいたに違いない。習慣が変わる時、人は抵抗（力）を感じるものである（「習性」となる）。これをニュートンの第二法則という（「ある等速運動（ある習性）から、別の等速運動（別の習性）に変わるためには、「力」が働かなければ（加速度運動）ならない」。これは五十年前に教養部の物理で習ったことである。やはりニュートンはえらい。

最後につけ加えておきたい。よしんば、本多氏の論点「そんなことは、五十年前にすんだことでは？」を認めても、私はこんなふう思った。

『AACKの今後の道Ⅱ夢』というテーマを追求することは、衛星の打ち上げに似ている（現役の時、そんなことに携わっていた）。一つの衛星は、その時点の科学者の夢を一杯のせて打ち上げられる。

衛星が打ち上がる前に、いくつかの準備段階のステージがある。何度も何度も議論する（一つの衛星が打ちあがるのに十年かかる）。

第一段階は、可能なことを、実現性とは無関係に唱えることである。この段階では、どんな夢や希望を述べてもよい。現実性を無視しているのだから。

このあと、数段階ある。そして最後の段階は、実現を前提として夢を語るのである。その時点では、実現可能なこと（と思われること）は、議論からおとされる。

今日、科学の巨大プロジェクト（宇宙開発とか、大加速器計画とか、宇宙天文台とか）に採られている方法である。

こう考えると、本多氏の議論は、一九五五年という年代を考えても、それは第一段階の議論で、現在のニュースレターで追及する議論は、最終か、その一つ前の議論（実行可能の議論）であり、けっして「五十年まえにすんだこと」ではない。だから本多さんよ。五十年前に済んだことでは？と言わずに、二十一世紀を生き抜くためにAACKはどうすればよいか、の実行計画を考えて下さいよ。

【特集】AACKのゆくべき道

Aシリーズ

A15 パイオニアのゆく道

梅棹 忠夫（理動物 一九四三卒）

AACKはすることがなくなったという。ヒマラヤやカラコルムの未踏の高峰はほとんどのぼられてしまった。世界の未踏峰の初登頂をめざしてきたAACKは、その目標をうしなつたのである。AACKはこれからなにをするのであろうか。

未踏の高峰にいどんで、それに登頂するということのほかに、AACKには当初か

らもうひとつの衝動があった。それは地球上の未知の地域を探検するといううごきである。高峰にいどむというのが垂直の志向とすれば、こちらのほうは、いわば水平志向である。このふたつの傾向はAACKのなかにはやくから存在して、ときにはあいたすけながら、ときには矛盾をはらんで、おたがいに牽制しながらやってきたようにみえる。

のぼるべき未踏の高峰がなくなっても、未知の地域の探検がそれにかわることができれば、それでもよかつた。しかし、かなしいことには、その未探検地域そのものが地球上でほとんどなくなつてしまったのである。垂直志向の道においても、水平志向の道においても、AACKはなすべき仕事がなくなりつつある。これをどうすればよいか。

地球上でなすべきパイオニア・ワークがなくなつたとすれば、パイオニアたちはどうすればよいか。わたしは当然の帰結として、地球外にパイオニア・ワークの場をもとめるべきであるとかんがえている。じつは、このことについては、わたしは戦後まもなく気がついて、この事態がいずれ到来するはずであることを書きしるしている。一九四九年のことである（「梅棹忠夫著作集」第十一巻『知の技術』四七九―四九〇ページ参照）。そのころはまだエベレストものぼられていないし、宇宙船のうちあげもなされていなかった。しかし、パイ

オニーアたちが宇宙に飛びだしてゆかなければならないということは、パイオニーアというものの本質からいって論理的必然であった。

AACKのゆくべき道が宇宙探検であるといえ、あまりにもとつびなかんがえとおもわれるかもしれない。そのあいだに、中間項として「南極探検」という一項をくわえれば、宇宙とAACKがむりなく接続することが了解されるであろう。南極探検にはAACKからは西堀栄三郎越冬隊長をはじめ幾人かの隊員をおくりだしているのである。極地のつぎに宇宙があらわれてもふしぎはないであろう。

宇宙旅行はすでに現実となつてきている。それは国家の事業としてばかりではなく、私的なくわだてとしてでも成立するほどの状況がうまれつつある。極端な話であるが、手づくりの宇宙船で地球のそとに飛びだしてゆく可能性さえあるかもしれないとわたしはかんがえている。AACKが組織をあげて宇宙旅行の実現に努力するというのも、パイオニーア集団としてのAACKのめざすべきひとつの方向ではないだろうか。それはAACKが当初よりもっていた『デジデリウム・インコグニチ（未知への渴望）』の実現にちがいない。現在、すでに宇宙旅行を体験した人間の数は数百人に達するという。その人たちの国際的な組織があつて、しかも、それがAssociation of Space Explorers（宇宙探検家協会）と名のついていることを知って、わたしはまことに意をつよくした。アルパイン・ク

ラブのほかにも探検家の精神がそだつていたのである。AACKがパイオニーア集団としての意志をもちつづけるとすれば、われわれはこの宇宙旅行者たちとの精神的連帯をかんがえるべきではないか。事態はもはや、そのあたりにちかづきつつあるのである。

〔編集者注〕

次の論文には、特集「AACKの道」に關したものと、著者が初登頂したノシヤックのその後のことが記載されている。

後者は、AACKが産み落とした子供が、その後どのように成長を遂げたかを知りたいという思いから、編集者が「あの山はいま」と題して、AACK会員が初登頂した山々のその後について、何人かの会員に投稿を依頼したので、筆者はそれに応えたものと思われる。

A16 ノシヤックとその後

酒井 敏明（文英文・地理 一九五六・六〇卒）

北村泰一先輩から何か原稿を書くようにとお奨めがあつた。AACKの今後をいかに考えているか、哲学を述べよとの仰せである。

本会の将来については幾人もの論者が意見を開陳しておられる。申し訳ないが私はあまり積極的な意見をもたない。本会はヒマラヤ

未踏峰に登るために結成された会であり、それなりの成果をあげたことは万人の認めるところである。今や時代は代わり、私たちが打つて一丸となつて取り組むべき対象はない。重箱の隅をつつけば人跡未踏の山頂は見つかるだろうが、人工衛星が飛び交いGPSが日常茶飯のものとなつたグローバル化した今の世では、個人的な冒険の世界はあり得ても社会的な評価に耐え得る企画は考えにくいと思う。

梅里雪山をどうするのか、これは避けては通れない課題である。残念だが、現在の会員の力量では一七人の無念を晴らすために即座に挑戦をと事態が動き出すことにはならないのだ。私のような高齢者は遺憾に思うだけで、会としては今しばらく沈黙を続けざるを得ないのであるか。このこと自体、七二年前に創立された本会がいつの間にか別の種類の会に変質してしまつていくことの証明なのではあるまいか。

梅里雪山にけりをつけることができたのには、AACKは徐々にその生命を終えても良いのではないかと、私は思う。時代の先頭に立つて、将来を切り開くべく苦闘する道はあつさり他人に任せ、過去の歴史を懐かしみ、気心の知れた仲間とともに悠々として生きる。閉鎖的との非難を浴びるかも知れないが、会員はいずれも知的で上品な紳士ばかりという会であることを目指す。個々の会員がそれぞれに目覚しい社会的活動をすることはあるけれども、会自体は特段の事業は行わない、

従って会が存続するか消滅するかはほとんど問題とならないような集団。そうなれば、国家公認の社団法人であることはもはや許されないことになるのであろうか。

話題を変えて、さてノシヤックである。A C K 再建後三度目の遠征隊がアフガニスタンに向かったのは一九六〇年夏、今から四三年前である。酒戸弥二郎隊長他五名、パミール高原学術調査隊を名乗り、ワハーン通廊に日本人として初めて入り、生物、地質などの調査をし、さらにヒンドウークシユ山系にある未知の高峰の登路偵察をする筈であった。アマダリア河源流パンジャ河岸に着いてワハーンの入り口を覗くことはできたが、通廊を奥深く東へ遡ることは許されず、通廊入り口の町イシユカシムから二〇キロほど東進し、支流カジデー谷を南へ折れてヒンドウークシユ北麓の谷間にベースキャンプを作ったのは七月半ばのことであった。

目標として掲げていたノシヤックはその名前とティリチミールに次ぐ高峰であることを知る以外にはほとんどいかなる情報もなく、三〇年ほど昔に数十キロの遠方から撮影したパノラマ写真の片隅にそれらしい雪のこぶがあることだけがわかるという、すこぶる頼りない話だ。隊長ヤジさん、副隊長吉井良三(生物学)、澤田秀穂(地質学)の両先生はシニアメンバ、若手は廣瀬幸治(三〇歳)、岩坪五郎(二七歳)、私(二八歳)の三人、たいへんな悪路を慣れぬ軍用車両を運転する激務を引き受けた廣瀬さんは登山活動の初期に

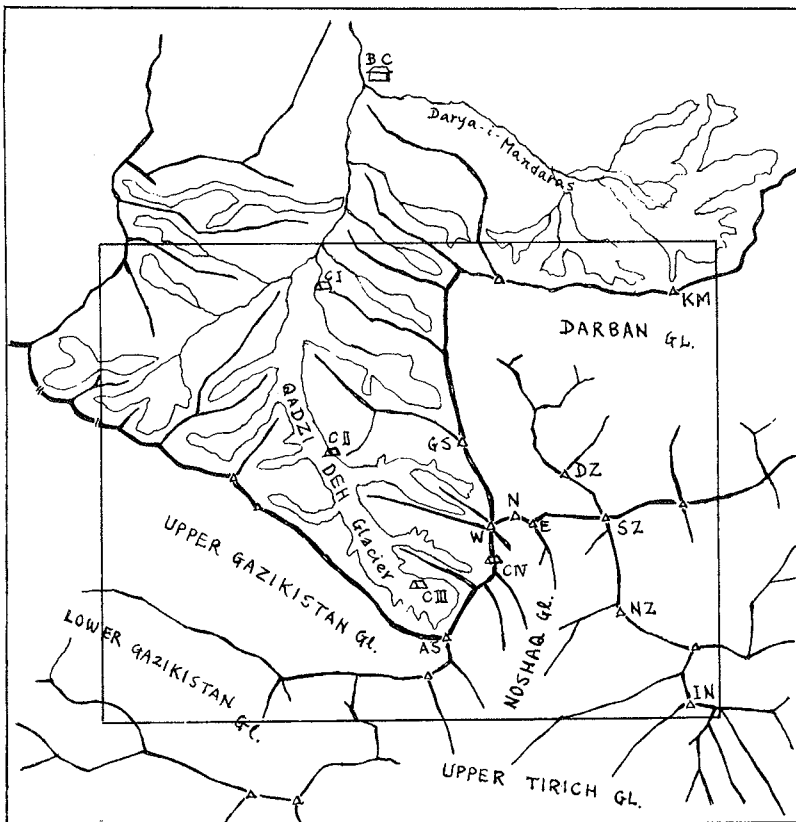
は体調を崩していて、高所で活動できるのは岩坪と私だけ、地元のタジク族ポーターは三人が四五〇〇メートルまで、うち一人が五五〇〇メートルまでかろうじてついて来たただけだ。C I 以上はいつでも二人だけ。

クォーターインチ地図は不正確、登路に使ったカジデー氷河は予想よりはるかに短く一五キロほどで終り、ヒンドウークシユ主稜線に突き上げている。この部分では主分水嶺がアフガニスタンとパ

キスタンの国境になつてゐるのだが、国境上の鞍部の位置も、鞍部から主峰への稜線の長さも方向も地図と現実は大違いだ。読者の参考のために図を付したのでご覧ください。図1は宮森常雄氏の労作『カラコルム・ヒンズークシユ登山地図』(ナカニシヤ出版)のノシヤック周辺を描くものから部分的にトレスさせていたのだ。図2は図1の中枠で囲んだ範囲に限るが、当時隊が参照したクォーターインチ図を手描き複製

- N : Noshaq主峰 7,492m
- E : Noshaq東峰 7,480m
- W : Noshaq西峰 7250m
- GS : Gumbaz-i-Safed 6,800m
- AS : Asp-i-Safed 6,507m
- KM : Koh-i-Mandarar 6,628m
- DZ : Darban Zom 7,419m
- SZ : Shingeik Zom 7,294m
- NZ : Nobaism Zom 7,070m
- IN : Istor-o-Nal 7,403m

図1 ノシヤックとその周辺



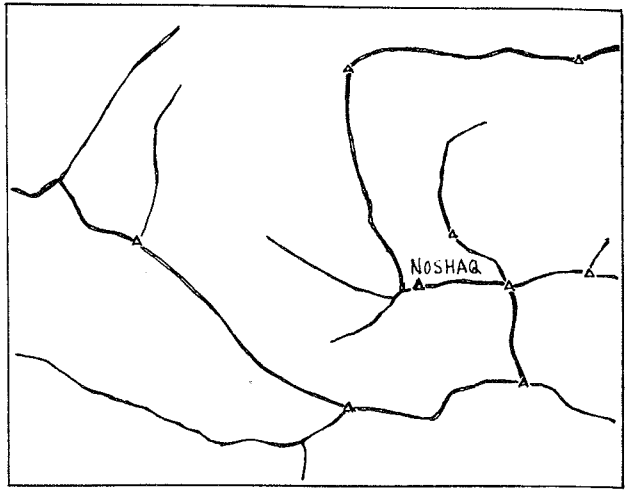


図2 古い地図に見る主分水嶺

したものに基づき、他の図をも参考にして描いた。

晴天続きの絶好の気象条件に幸いされ、岩坪と二人で登路を探し、装備・食料を荷揚げし、頂上へのルートもどうやらつかめた、来年の本隊に吉報が届けられると安堵してBCで休んでいるところへ、ポーランドからの総員一二人の登山隊が出現したのである。

こちらは動けるもの二人だけ、向うはアルプスやコーカサスで腕をみがいた大男がゴロゴロいるらしい。偵察は日本隊、初登頂はポーランド隊となるのでは困る。いろいろのやりとりがあり、私たちは数日待つ

から貴方は高所馴化を早めて合同で登頂隊を編成しようとの提案までした。結局、岩坪と私が八月一七日に初登頂した。おくれたポーランド隊は二七日に七人が頂上に立ち、私たちが頂上の石片の下に埋めた小さなこけし人形を発見して、両者が登頂したことをたがいに確認しあう幸運なおまげがついた。

このようにそれまでは世界の登山界にほとんど知られることがなかったノシヤックであるが、その後殺到する各国登山隊の目標となり、幾十の登頂者が輩出することになるうとは、神ならぬ身の知る由もないところだ。深田久弥さんの『ヒマラヤの高峰』3（白水社、一九七三）には六三年のドイッ・オーストリア隊の西稜からの第三登、六六年のポーランド隊の第四登と第五登までが記されている。私は学研の『世界山岳地図集成カラコルム・ヒンズークシユ篇』（一九七八）が出るときに、ノシヤック他数座の解説を執筆した。

ノシヤックは図1に見られるように西峰（七二五〇）、主峰（七四九二）、東峰（七四八〇）の三つのピークがほぼ西から東に並び、南側にある私たちが登路とした鞍部から北へ走る国境稜線は西峰に突き上げたのち、高度を減じてさらに約一〇キロ北へ伸びてから東に曲がる。途中に私たちがスノウピークと呼んだ六八〇〇メートル峰（その後グンバズ・イ・サフェドつまり白い陵墓と命名）の高まりがある。西峰から東へ派生

する頂上稜線は約五キロ先にシンゲイク・ゾムを起し、その南東方にヒンドウークシユ第三位のイストル・オ・ナール山塊がひかえている。正直にいえば、ノシヤック西峰は確かにア・パ両国境界線上に位置しているが、主峰と東峰は完全にパキスタン領土内にある。誰も見ていないところで私たちは越境し、隣国の山に登ったわけだ。

前記学研版『登山地図集成』に、当時私を知り得たノシヤックおよび周辺の山々の登山史を書いたのだが、登場した国はポーランド、ドイツ、オーストリア、イタリア、アメリカ、フランス、スペイン、ブルガリア、ユーゴスラヴィアと多彩を極め、初登頂の南方国境稜線經由、西峰から西北西にカジデー氷河に落ちる西稜經由、西峰から北のグンバズ・イ・サフェドへの縦走、主峰最高点からカジデー氷河へのスキー滑降、東のパキスタン領タルバン氷河からノシヤック北面を攻める隊、東南面アッパーティリチ氷河から、つまりティリチミール山塊とノシヤックを隔てる氷河から本峰南面をうかがう隊など、考えられる限りの多方面からこの山は登頂や縦走が企てられることになった。

望月達夫ほか三氏編集の『深田久弥ヒマラヤの高峰』4（白水社、一九八三）の「ノシヤック」編者補遺によれば、「一九八二年現在、じつに四十登を越える登頂例が残されている」そうで、「近年の記録では、一九七八年七月、アメリカ隊（七人）が入

山、七月二十七日四人が頂上に立ったが、後続のS・ムーモール隊長と隊員一人が遭難死し（中略）アフガニスタン紛争のため、以後ノシヤック周辺での登山活動はとぎざれている。」

よく知られるように、一九七三年のクーデタでザヒル・シャー国王はイタリヤへ亡命、七九年にはソ連軍侵攻開始、八九年に同撤退、タリバーン政権の強圧政治が続いた。二〇〇一年米英軍侵攻と、その後この国は戦火と混乱二十余年の苦難の歴史を強いられることになって、いまだに世界最貧国から抜け出せない。

一九六〇年から十数年のあいだ日本からもヒンドゥークシユにたくさんの遠征隊が押しかけたが、なぜかノシヤックに登頂した隊はない。一九七一年アッパティリチ氷河の北支流ノシヤック氷河からオーストリア隊の三人が南面からの初登頂をはたし（七月二三日）、同じころダルバン氷河源頭部を経由北面からの登攀を試みた松商学園短大隊八人は時間切れ、途中から撤退したという。

第二次大戦後の日本のヒマラヤ登攀史においてわがAACKが先蹤者としての役割を演じたことは私たちの誇りである。マナスル登山許可は本会が取得したものであり、今西錦司さんが踏査隊を率いたのももちろん、一九五三年マナスル第一次隊にすぐ続いてネパール入りを果たしたのは本会のアンナプルナ遠征隊であった。カラコルムでは

京大が一九五五年ヒスパール・ピアフォ・バルトロの三大氷河地域に日本人初の学術調査隊を送ったのをうけて、京大探検部が小遠征隊を二つ出し、五八年に本会はチョゴリザ遠征隊（桑原武夫隊長）を派遣し、初登頂に成功した。この二年後がわがノシヤック隊の出番であった。

立教大学隊が早くも一九三六年にインド領ガルウルヒマラヤのナンダ・コートに遠征隊を送り、初登頂に輝いたが、カラコルムとヒンドゥークシユでは日本隊としては本会をもって嚆矢とするのに、その後がさびしいと思うのは私だけだろうか。

チョゴリザのあと私たちはすぐにサルトリ・カンリ登山計画を立て、その準備に取り掛かったが、許可がすぐにはおりないことがわかり、ヒンドゥークシユの未知の高峰に転進することになった。七四〇〇メートルを越える、山の姿かたちもまったく不明の山に唯一度の試登で初登頂できるとは誰も考えなかったから、酒戸隊は登山についてはルート偵察を主任務とし、登頂可能なみちが見つかったならば、すぐさま翌年に本隊が派遣されることが予定されていた。それ故にこの年には登攀要員三名の小さな隊が編成されたのである。

外国遠征隊への対処策を全く知らず、まさに後進国そのもののアフガニスタン政府が同じ山に同じ時期二つの隊に許可証を出したために、日本隊は夢想もしなかった別の隊が突如として出現したことに肝をつぶ

し、ポーランド隊は遠路はるばる到着してみればほかの隊がすでに活動中であることを知って、仰天した。この状況で酒戸隊は急遽偵察隊に終る事をやめ、登頂隊に変質した。

これでおわかりのとおり、当時AACKは矢継ぎ早にチョゴリザに続くカラコルム第二計画としてサルトリ・カンリを標的とした。許可が得られるまでのつなぎとしてヒンドゥークシユ計画は誕生したのである。サルトリ・カンリは精力的な許可取得交渉が結実し、六二年の初登頂隊（四手井綱彦隊長）の成功が導き出された。

それにひきかえ、AACKからノシヤックのあとを追う第二、第三のヒンドゥークシユ遠征隊は現れなかった。一年に十数隊の日本隊がパキスタンとアフガニスタンの山々に殺到していたのに、何故だろうか。

そこに初登頂主義の功罪を見ることができそうに思う。それを考え始めるとわりと時間がかかりそうだし、今回には間に合わない。別の機会に試みることにしたい。

A17 AACKは進化しよう

北村 泰一（理地物 一九五四卒）

以下の議論には前提がある。それはAACKが「パイオニア・ワーク」を追求する

集団である、という定義である。これをは
ずすことは出来ないという前提である。A
A C Kがこの看板をはずし、単に山登りの
会に変化するならこんな議論はしない。『パ
イオニア』という看板をはずさず、しかも
死に絶えたくないから、こんな議論を興す
のである。

結論を言おう。私は、A A C Kが二一
世紀に生きたるためには、宇宙進出 しか
ない、と思つてこれを書いている。地球上
から宇宙へ：これが進化である。

本号のニューズレターは画期的である。
木村雅昭新会長（一九六六卒）が『垂直志
向から水平志向』への遷移を示唆し（新会
長挨拶）、梅棹忠夫氏（一九四三卒）が『パ
イオニアのゆく道』と題した論文に、A
A C Kの宇宙進出の道をきわめて論理的に
述べられている。松井敦男氏（一九五六卒）
が、そうした夢を実行する若者を集める具
体案の一つを提案している（A A C Kと山
岳部共催の中学生向け講演会）。松林公蔵氏
（一九七七卒）と私（一九五四卒）も、京大
山岳部の若者がA A C Kに少しでも興味を
持つようにとの願いをこめて、このニュー
ズレターを山岳部に贈送しはじめた。

梅棹論文によると、同氏は、一九四九年
の早くにそうした考えに達したと述べてお
られるが（梅棹忠夫著作集、第十一巻、一
九九二）、これは、A A C Kが『パイオニ
ア・ワーク』を追求する集団である限り、
論理的な必然結果として導き出されたとい

う。その当時は、エベレストも未だ登られ
ていなく（初登頂は一九五三）、パイオニ
ア・ワークを叫ぶ岳人は、この地上に、そ
の志を満たす未知の地域があちこちにあつ
た。

一方、宇宙への進出はまだ空想でしかな
かった当時に（人口衛星の初飛翔は一九五
七年であり、人類が初めて月へ飛んだのは
一九六九年である）、その宇宙進出は論理的
必然であるというその結果は誠に卓見であ
り、流石になあと梅棹忠夫氏の面目躍如た
るものがある。しかも、氏が恐らくは大学
院生である若い時に、である。本多勝一氏
（一九五四入部）も、その著述で見れば（本
多勝一私家本『旅立ちの記』一九八二）、パ
イオニア・ワークを追求する登山家という
立場では、月などの未知領域は科学者の対
象であり、岳人のそれではないと否定的で
あるが（この点が私の反論するところであ
る）、学生当時は“宇宙探検”をしきりに口
にしていたことを思い出す。ニューズレタ
ー#22（二〇〇一年十一月号）では、高村
奉樹氏が、『A3 ここまで来たA A C K』の
中で、『探検の行方を問われた私は、二十一
世紀は人の心への深い探求、そして宇宙探
検でしようかと結んだことである』と述べ
ている。

パイオニア・ワークを追求する限り、宇
宙進出というのはその論理的必然であるとい
う梅棹氏の考え、またまた、岳人の習性
としては否定的ではあるが、本多氏のよう

に、更に高村氏のように、A A C Kには、
昔から宇宙進出の考えがあつた。他にもA
A C Kの宇宙進出を考えていた人があつた
に違いない。

しかし、当時は、それらはあまりにも『真
夜中のニワトリ』（西堀栄三郎氏のアダ名。
先が見えずぎて、真夜中にもう朝を告げる
鶏鳴をはじめ、という意）的であり、眼
前に志を果すべき領域がいろいろとあつた。
そうした先見的意見には現実感を持てな
かつた。

しかし、今やこの地上に我々の志を果す
領域がないことが事実となつた。一刻の猶
予も出来ない。このまま、“死”まで眠り続
けるのか。

鶏鳴はやはり夜明け前に聞くと実感があ
る。そして、今や東の空は白みかかつてい
る。

私は、これから、いかにこの宇宙進出が、
抽象的でなく具体的な実行可能な考えであ
るかを述べる（次号以後に）。いはば、衛星
打ち上げの最終ステージの議論である。

地上から宇宙探検へ。

登山界で、それはあまりにも飛躍しすぎ
ると感じる岳人も多いと思う。しかし、A
A C Kはただの登山団体ではない。“探検”
登山の集団である。A A C Kはヒマラヤを
登るために設立された団体である、と唱え
る人もあるが、“ヒマラヤ”は中項目の目標
であり、大項目の目標は、未知を探る“探
検”であると考ええる。

A A C K 設立当時（一九三二）は、ヒマ
ラヤ全体が探検の対象であり、大項目の
“探検”という文字をあえて入れなくても意
味が通じた。その証拠に、A A C K はヒマ
ラヤの“初登頂”だけを追及してきて、第
二登、第三登も目的たり得たという訳では
ない。だから、如何に最高峰とはいえ、エ
ベレスト第二登以後なんて問題にもならな
かった。個人でエベレストにゆくのは良し
とされるが、A A C K という組織が第二登
以後を目的として遠征することはなかった。
ヒマラヤを目的としているとはいえ、それ
はあくまで“初”である。探検である。

これを考えてみると、A A C K は“探検
登山”集団である。あくまで探検がさきに
あり、探検のない登山（第二登以後）は A
A C K の対象ではない。

とすると、設立当時ヒマラヤを唱えたの
は、ヒマラヤの高峰という、いわば“点”
で象徴するその周辺の未知の領域を探るこ
とであり、第一義的に頂上という“スポッ
ト”を対象とした訳ではない。もし、A A
C K 設立初代の今西・西堀・桑原などの諸
氏が、コロンブスの大航海時代（一五〇〇
年）に生きていたならば、ヒマラヤのス
ポット（一次元）といわずに、広大な未知
の領域（二次元）を求めて、大航海に乗り
出したに違いない。

それを考える時、いま、地上のヒマラヤ
（二次元）の未知の高峰（スポット、一次元）
に行き詰まったわれわれが、二二世紀に宇

宙（三次元）を目指すことは、それほど突
飛なことではない。

更に考えてみよう。地球四六億年の歴史
の間に、生命は、ある環境が安定している
間（ヒマラヤに未登の山がある間）には変
化がなく（A A C K の存立は安定している）
環境が変化する時に（初登頂する山がなく
なった時＝現在）、飛躍的に変化（進化）し
てきた。悪い方向に変化したものもあるう
が、それらは絶滅して現在は残っていない。
新しい環境に順応したモノだけが生き残り、
これを進化といった。こうして小さな微生
物から人間へと進化してきた。

具体的には、昔地球の気中には酸素がな
かった。生命は窒素で維持され、放射線な
どから守られている海中で育ってきた。海
中のある植物が少しずつ酸素を放出して、
海中にも酸素が存在するようになった。生
命は酸素で生きる方がはるかに効率的であ
ることを知り、生命維持構造を窒素から酸
素へ切り替えて進化をはかってきた。

海中に飽和した酸素はやがて空中に放出
され、そしてオゾン層が出来上がった。有
害な紫外線（放射線の一種）は、出来上が
ったオゾン層で阻止される時代がきた。ひ
弱な生命が地上に上っても、有害な紫外線
はもはやこない。生命は続々と海中から地
上へ進出してきた。そして『陸上』という
新天地を獲得した。それが爬虫類であり、
以後、幾つかの段階を経て人間へと進化を
続けた、と考えられている。

そんな昔のことでなく、もっと最近の歴
史時代のことを考えよう。ボストンの近く
のプリマスの海岸にメイフラワー号（第二
代目）が保存係留してある。オリジナルの
メイフラワー号は、一六二〇年に、ヨーロ
ッパで生きる環境の悪くなった人々（ピユ
ーリタン）が、行く先どうなるかという不
安をいだきつつ、家財を売り払い、背水の
陣でこのメイフラワー号に乗り込み、アメ
リカ新大陸を目指した。

この二代目の船の中には当時の船員の服
装をした人（公務員）がいて、一六〇〇年
代になりきって見物人に話かける。当時と
しては、新アメリカ大陸へ漕ぎ出すことは、
いかに精神的に大変なことであるかを切々
と説明していてくれたようであった。英語
に慣れない私は、始めは何を語っているか
わからなかつた程であった。

A A C K も同じことである。地上の未知
領域がなくなつて生きるすべを失つたら、
地上でない領域へ進出して生きながらえ、
そして進化すべきである。海中から地上に
進出した生命のように、旧ヨーロッパから
アメリカ新大陸へ進出した移民のように。

A A C K がこのまま絶滅しないことを望
むなら、逆により発展することを望むなら、
それしかない、と歴史は教える。

宇宙進出といつても、目標は火星である。
火星は、いたるところ未知探検領域である
が、山に登るなら、高さ二万九千 m に及ぶ
オリンポス山がある。九千 m の断崖がおち

こむマリネリス峡谷がある。そこには何があるだろうか。一番の興味の火星生命がそこにあるかも知れない。科学者は、そんなところへ、危険をおかして行こうとはしないことは、南極で経験済みである。訓練をうけ、意志のある登山家しかゆけない。AACKのAの字が、本当に生きるはこのような目標ではないか。

しかし、明日にでも実現可能な目標は月である。国家プロジェクトとしての月への第一歩は一九六九年にすでに果たされた。今は、民間人がいつ月にゆけるか、というレベルになっている。日本の清水建設も、社内にもホテルプロジェクトチームを発足させて、月にホテルを建てることを研究しているときく。こんな時代に、地上の山に固執し、目標はもはやナイナイと意気消沈していても良いのだろうか。

こんな考えを、実際に実行できるのは、今現役でいる山岳部の若者である。彼らの月への体験を基にして、火星の未知の大地を闊歩するのは、今の中学生以下の少年であろう。いや、お母さんのおなかの中にいる赤ちゃんかも知れない。その第一歩として、だから松井敦男氏の「山岳部とAACKとの共済の中学生向けの講演会」という提案に共鳴するのである。今の高校生や中学生が、AACKを目指して京都大学に入ってくる日を夢見ているのである。

こんなことを言っても、具体的なことが判らないなら、このような議論は第一ステ

ージの話で終わる。このニュースレターは最終ステージの議論を求めている。

次号以後から、宇宙進出が如何に現実的な目標であるかを述べたいと思う。

ただ、これには、少しばかり筆者から要望がある。こんなことを書いても、誰も興味を感じる人がいなければ、私の書く勇氣はくじける。もし、誰かが興味をもってくれたら、勇氣百倍となって書くだろう。匿名でもよく、メールでもファックスでも電話でもよい。そんなことを知りたいと思う。

なお、メールの旧アドレスは廃止した。新アドレスは dkikamura@yahoo.co.jp である。

また、住所は 〒813-0043 福岡市東区名島 5-38-13 電話・ファックスは092-661-7309

【特集】言いたい放題——批判——

B3 これだよいかAACK(その2)

「焦眉の急」

北村 泰一(理地球物理 一九五四卒)

AACKの焦眉の急である仕事は二つある。

①つは、一刻も早く一人でも「若者を獲得」し、AACKの人口構成を円筒形か通常の三角形に近づけること(現在は逆三角

形、第1図、第2図)。

②つは、二一世紀に通じるAACKの「夢」を確立すること。

この二つは、車の両輪の如く、切り離すことは出来ない。

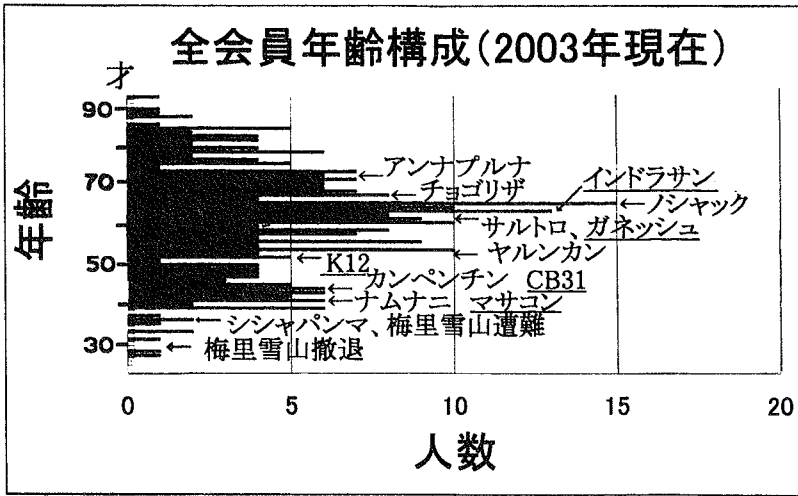
AACKに若者がいなくては、将来の夢もへつたくれもないし、逆にAACKに夢がなければ、若者にとってAACKに魅力を感じない。

〔1〕若者を集めよう

①の「若者の確保」の若者とは、京大山岳部の若いOBあるいは山岳部現役の若者を意味する。それは、実質的に、京大山岳部以外の出身の若者は全体の0.7%に過ぎないからである(注)。

(注)二〇〇二年現在(AACK会員名簿二〇〇二年)、AACK会員総数二八三名、京大山岳部以外の出身者は全員で二一名(7.4%)。この内、若者(ほぼ三三歳(平五卒)以下の人)は三名(全体の14%)、更に、この中から一名の遠隔居住者(京都以外の遠隔都市)の若者を除くと、結局、外部から入会して、京都在住の若者は二人(全体の0.7%)となる(女性の一人は卒業年次非記載)。

以下の議論では、こうした外部からの「若者」を疎外するわけではないが、現在は人数も少ないので本論議の外とする。ここでいう「若者」とは、京大山岳部出身の若者をいう。



第1図：AACK全会員の年齢分布図（2002年会員名簿による）。各遠征が行われた年に新人（23/24歳）となった人の現在の年齢を縦軸に、その人数を横軸に書いてある。アンダーラインは、KUAC（京大山岳部）主催。

①の若者の確保の必要性のあることは、ある会員には情緒的（感じとして）には理解されていたであろうが、これは『高齢化は社会の趨勢』とか『なんとかなる』とか……、とにかく、切羽詰まった『危機感』がなかったと思える。それは、先月号（#25、二〇〇二年八月号）の山口克氏の文『カンペンチンとメイリーの発想について』の中の一節や、北村泰一の『これでよいの

かAACK』（#25、二〇〇二年八月号）で、初めて、数字として認識されたもので、AACK会員は、長い年月を、『若者が少なくなった』という感じだけで過ごして来た。こんな問題は、とっくの昔に数量化されて理解すべきものである。数量化してみると、若者の減少は、ヤルンカンの時（一九七三）にすでに始まり、一九八三年以後は若者の入会者がはまばらになり、一九九〇以後はほとんど入会者が途絶えていることがわかった。

これらのことは、当事者には感じで判っていたであろうが、情緒的な感じだけだから、その対策までは本気でとりかかれなかったのだろう。

今更言うまでもないが、どんな団体（社会）でも、若者のいない（少ない）団体は必ず衰微する。旧制高等学校の同窓会を見よ。こうした同窓会には本質的に若い会員はいない。現在、なお存続している旧制高等学校同窓会は少ないであろう、そして、それらはいずれ消滅してしまう運命にある。

社会も同じである。しかし、日本の社会が高齢化の道を進んでいるからといって、AACKが拱手してそれに従わなければならない理由はどこにもない。努力しなければ、社会の趨勢に従うことになるが、努力すれば、そこにいろいろな道がある

はずだ。

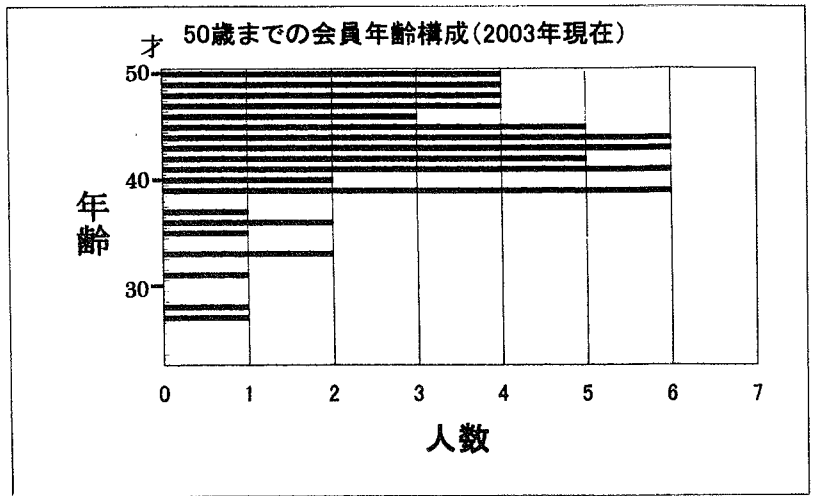
若者の獲得を、今まで本気で考えてこなかった証（あかし）は、編集子が『AACKの今後の政策は？』を会員達に尋ねたとき、異口同音に『その答えの前に、『まず、梅里雪山の後始末をしなければならぬ』という答えが返ってきた。

『あと始末』というのは、梅里雪山の初登頂を果たし、志を果たさずに遭難死した仲間を慰めるという意味である。このままでは、彼らは犬死になるといえる。それはそうだ。もつともなごことだ……。

しかし、口で『梅里雪山の後始末』といながら、それを実行する若者の獲得を試みた形跡はない。昔と同じく、AACKはじつとしていて、自然に若者が入会するのに任せている状態であった。

このニュースレターのどこを探しても、それについて論じた論文はない（と思う）。これは、梅里雪山の『あと始末』を情緒的に頭の中でしか考えなかったからではないか。本気で、具体的に『あと始末』を考へるなら、すぐに『若者を獲得』せねばならないことに気づき、具体的なことが議論された筈である。

AACK会員でない他の山岳人に、梅里雪山の初登頂を依頼する道もあると誰かが指摘していたが、会員でない山岳人に依頼して梅里雪山の初登頂を果たしても、それを『梅里雪山のあと始末をした』といえるのだろうか。



第2図：現会員だけで遠征隊を構成できるか、という疑問に答えるために、五十歳までの会員の年齢分布を調べた。隊長クラスの四十歳代の会員の人数は満たしていても、二十歳代、三十歳前半（登攀要員）の会員は殆どいない。これでは遠征隊を組めない。分布は“逆三角形”である。各会員は日本全国に散らばることを思えば、京都在住者は各学年の20%か10%と見なければならぬ。だから、各学年一人の京都在住者を確保するには、各学年で五人～十人の会員を確保しなければならない。

には、『AACKは梅里雪山を避けては通れない。残念だが、現在の会員の力量では即座に挑戦へとはならないであろう』と。さらに続いて『梅里雪山にケリをつけたのちに、AACKは徐々にその生命を終えてもよいのではないか：』と述べられている。

しかし、現在の状況では、『このままでは、若者は永久にAACKに集まらない』と思われるから（一九八九年以後、京大山岳部出身の若者は一人しかAACKに入会していない（二〇〇一年笹ヶ峰会名簿）、酒井論文をもう少し続けると、

『若者が永遠に集まらないから、梅里雪山を会員だけでケリをつけ得る日は永遠に来ない。従って、AACKは永遠に生き続ける…』と、変な論理結果になつてしまう。（笹ヶ峰会とは京大山岳部の卒業生全員の組織）

これは、どこがいけないのだろうか。そうだ。若者が永遠にAACKに集まらないというクダリがいけないのである。だから、AACKに若者を集めよう。

第1図をご覧いただきたい。これは山口克氏が出した数字の表（参照論文前掲）と

本質的には変わらないものであつて、二〇〇二年のAACK会員名簿をもとに書いたものである。名誉会員を除いた全会員を抜いている。会員の最高年齢は九三歳（一九三三卒）、隊を組める年齢として五十歳までを考え、その分布を第2図に示してある。

各学年に五人～十人の会員が確保できれば、逆三角形（▽）でも遠征活動を実行できるかも知れないが、現AACKに、会員ゼロという年が続くことが問題なのである。

第1図・第2図で、ひと目で判ることは、年齢構成が逆三角形になっていることである。AACKが活発にやっていた頃には、若い会員が多かつたことである。

気になることは、ヤルンカンの時にすでに若者が減りはじめ、以後、つるべ落しに減っていることである。それでも、遠征は行われていたが、最後の梅里雪山遠征の時は、かなり無理をしていた様子がこの図からも伺える。

この図では、短期間では正常な三角形になつている期間もあるが、大きなトレンドとしては、ノシヤック（一九六〇）、インドラサン（一九六〇）、サルトロ（一九六二）を境として、分布が逆三角形に遷る。

分布が逆三角でも、若い会員の絶対数がある程度あればよい。しかし、最近では、若者ゼロの年次が続く。この十年間、若者は二名しか入会していない。これが問題なのである。（正確にはもう二人いたが遭難死した。）

現在になつて、“あと始末”をやるうとしても、それは出来ない。そのためには、まず若者の獲得から始めねばならない。が、隊をくむほどの人口形成が出来るまでには十年以上もかかることを考えると、事実上の“あと始末”は不可能である。われわれはまずそれを認めよう。それを認識しよう。そして、現状に危機感をもとう。

本号の酒井敏明氏の『ノシヤックとその後』

こんな人口構成になってしまったのは、永年、それに対する危機感がなかったからだと思います。

この問題（若者が続かない）が解決しなければ、AACKはこのまま自然死するしかない。ある会が自然死するとは、どんな状態になってゆくのかわからないが、徐々に衰微してゆくから、会員にはそれがわからない。だが、自然死までにはあと何年かの余裕がある。

唯一の解決策は、会員全員がこの現状を正しく認識し、危機感をもち、AACKがまだ生きてこの数年間に、この二点（人口構成の正常化と、AACK自体の夢の確立）の解決に最大の努力をすることしかない。『梅里雪山のあと始末』が先だなどと言わずに、まっしぐらに、まず『若者の獲得』に全力を尽くすことである。それが『梅里雪山のあと始末』に連なる。努力をして、それでもならなければそれは仕方がない。努力をして道が見つからねば、『枯死』に甘んじよう。努力したのであるから仕方がない。

AACKの構成人口が、通常の三角形構造になるには、十年、二十年、三十年以上かかるから、死なないうちに、一刻も早くこの対策を始めよう。これは焦眉の急である。若者を集める対策は緊急である。

ここで、若者がAACKに入る状況を考えてみよう。これは、次に述べるAACKの“夢”と密接に関係するが、それは次節に述べることとし、もう一つ重要な要素が

ある。

誰もが指摘していることだが、昔と現在の違いの一つは、現在は、AACKの会員と京大山岳部員との接触が少なくなったことである。学生運動以後のことだという。

我々は、AACKの登山哲学（パイオニア）を知って山岳部に入ったり、AACKに入っただけではない。そんなことは知らなかった。だが、若い大学院クラス、または会社勤務を始めたばかりの若い先輩が、あるいは合宿後の山行に参加したり、あるいはそうした先輩がリーダーとなって我々は山行を重ねた。その若い先輩を通して、その先輩と接すると同時に、AACKや山岳部の哲学を学んだ。AACKを身近に感じていった。つまり、われわれがAACKなどを知ったのは、先輩との“人間関係”によったのである。遠征を共にした人達は、更に世代の異なる先輩と接触し、より深い絆で結ばれたことであろう。私も南極の一年間を西堀栄三郎氏とともに暮らし、西堀氏のすばらしい点に驚嘆し、変なところを悩んだ。

若者を集め得る具体的方法を記そう。これは次の項と密接に関係するので、ここで述べることも含むので、次の項と一緒に読んでほしい。

若者を集めるためには、まずAACKが“夢”をもつことが大切だ。しかも、その夢は若者の夢と共通であり、しかもそれが、若者にとってAACKという組織を必要としなければならぬ。

まだある。こうしてAACKに魅力を感じ

た若者はAACK会員となって、我々がかつてそうであったように、次の若者に接し、その魅力をより若い者に伝えることが大切である。より若い者は、近い先輩との関係において、その行動を決定するものだから。

AACKとは別に、山岳部出身者が自動的に入る、『笹ヶ峰会』というのがある。いわば山岳部のOB会である。

その名簿を見ていると、一九九一年以来、山岳部員でAACKに入会し、現在健在な者は二名しかいない。毎年、一〜四人の部員がいたにも拘らず、である。

これらは、上記の人間関係がAACKにとつて逆に働いたと考えられる。つまり、ある世代がAACKに魅力を感じないで入会しないと（AACKという組織を必要としないとかで入会しない）、次の世代も、更に次の世代もAACKに入会しない。これが一八九九以来続いて、現在の不健康な“年齢分布”になっている。その連鎖関係は、容易に別の連鎖関係（AACKに入会するほうの）にならないから、はじまりの若者を惹きつけることがまず重要だ。

いったん、数年にわたつて若者の入会を得たならば、連鎖関係を奨励するような雰囲気をつくれれば、つまり、より若い会員はより若い会員と接触し、その会員も同様により若い会員と接触したり現役と接触したり（合宿や山行、集会）していると、年齢構成は徐々に正常になってゆくだろう。

だから、始めの数世代の若者を惹きつけることが、まず第一の仕事となる。それにはどうすればよいだろうか。

〔2〕AACCKの「夢」を議論しよう。

何度も指摘しているように、AACCKが夢をもつことは『若者を集める』ことと密接に関係する。現在、若者がAACCKに入らない原因の一つは、AACCKの組織力を借りなくとも、個人で山に登れるからである。これは至当な指摘である。

AACCKに若者が多かった当時（黄金時代）、AACCKの組織力を借りなければ、個人でヒマラヤへは行けなかった。外貨の制限もあったが、その費用も膨大で、個人ではとても賄えなかつた。

これは、AACCKの組織力には直接の関係はないが、私が南極へ行けたのは、西堀栄三郎氏あつてこそのことである（今西錦司氏の紹介状があつてこそ（ニューズレター#20、二〇〇一年「南極を夢みた頃」参照）、西堀氏が本気にしてくれたことを思いあわせると、間接的な組織力と言えないことはない）。

ところが、今はヒマラヤへは個人資金でゆける。南極へすら個人で行ける。組織に入会していろいろな制限を受けるより、気の合う仲間と、個人的に行つたほうがずっと万事宜り易いと事情が変わつてきた。AACCKに入る必要はどこにもない。

私が学生の頃、山岳部の友人たちは信じ

られないくらい熱情・エネルギーを示した。ヒマラヤに行きたいばかりのことであるが、私はそのエネルギーに驚嘆し、尊敬を覚えた。ある人は、登山許可を受けるために、ネパールで数ヶ月か一年を過ごした。大学院学生の上の身ながら、そんな熱情とエネルギーがどこから出るのだろうか。

しかし、そうした熱情は私の世代特有のものではないはずである。各世代、誰もがそうした熱情・エネルギーをもっている筈だ。今、高齢化しているとはいえ、そうした熱情・エネルギーがなくなつたとは思えない。AACCKを二世紀に存続させることは、当時のヒマラヤと同じほど、自分らの人生に重要ではないのか。

だから、まず、AACCKの夢を提案しよう。若者にとつて、AACCKの組織が必要であるような夢を提案しよう。そして若者を集めよう。AACCKが変質してしまつたなどと言わないで、AACCKの生き残り策を真剣に考えてみよう。

最後に、この稿をしめくりにあたり、AACCKの夢を提案する時に必要な条件を述べたい。

「若者を集める」としてAACCKが夢を持つこととは、車の両輪のように互いに関係することは今まで何度も述べたが、AACCKが夢をもち、若者がこの夢に集まるためには、「夢」は個人では成し遂げられない程の大きなスケールのものでなくてはなら

ない。AACCKという組織力を利用しなければ出来ないものでなくてはならない。昔は、ヒマラヤの高峰の初登攀遠征という、当時は個人で出来ない目的があるから若者が集まつた（それだけではないが）。

だから、新しいAACCKの夢をつくるにつき、「パイオニア・ワーク」と、「組織が必要」という二つのキーワードが重要である。

そして、そのあとに「連鎖関係」の必要性があるが、まずは「夢」を作ろう。

答えをいおう。私の答えはこうである。

それは「宇宙へ進出すること」である。答えはそれ以外にはないと考える。そんなことは不可能であると言うなら、AACCKは枯死する以外にない。自然死する以外にない。ただ、その変化がゆっくりしているから、気がつかないだけである。

これからあとの話は本号の「AACCKは進化しよう」をご覧ください。

【特集】若者を集めよう

C1 若者を集めよう

AACCKと山岳部が共催する
中学生向けの講演会

松井 敦男（理物理 一九五六卒）

AACCKの目指した「山」は、未踏峰で

あった。ところが、未踏で魅力ある山も段々標高を下げてきた。加えて、A A C Kでは若手会員が増えない。この二重の問題にA A C Kは悩まされている。そこで、新たな夢（目標）と哲学を提示できれば、若い者も集まり、この二重苦から抜け出せる、という意見が出された。大賛成である。一刻も早くA A C Kの新しい夢と哲学をはっきりさせたい。

ニューズレターを読むと、なるほどと思う意見がたくさんある。でもまだ決定的な提案にはなっていないようだ。壮大な案は、多くの意見を参考にしながら、提出されるであろう。今や最終提案の時期になっている。秘蔵の名案をお持ちの方は、是非聞かせていただきたい。こんな期待をするのは、甘い考えかな。でも、素晴らしい夢の提案が出てくる気配を感じている。

ところで、新しい『夢』の提案がでて、それを実行するには若手会員を持つていなければ単なる夢に終わる。次世代の人材を育てなければならぬ。それには、十年程の月日がかかるであろう。また、『夢』の提案がなされても、提案を議論し煮詰めるのに一年か二年の時間をみておかねばならないだろう。議論が煮詰まった後に若手会員集めの活動を始めるのでは遅すぎる。会員を増やしても、夢が出なければどうにもならない、会員を増やすのが先か、夢を提示するのが先か、話は混乱する。しかし、この二つのことは同等ではない。時間のずれ

がある。『夢』の提案は、明日にでも出てもかもしれない。一方、若手会員を増やすのには、長い時間が必要だ。

A A C K会員を増やす最短手段は、京大山岳部部員を増やすことだ。山岳部員を増やすには、京大山岳部に入りたいと思う人に京大に来てもらわねばならぬ。中学生に対してA A C Kの宣伝をしよう。A A C KがA A C Kらしい点は、学識経験や社会経験豊かな知識集団の山登りであった。それを知ってもらって、京大入学、山岳部入部、A A C Kへの道を進んでくれる若者を集めよう。

諸先輩がどんな仕事をしたのか、中学生に知ってもらうために、A A C Kと山岳部の共催する講演会を継続開催することを提案したい。講演の題目は、人文、自然科学のあらゆる題目を取り上げればよい。A A C K会員以外で講演を引き受けてくれる人にも講演を依頼しよう。ノーベル賞の受賞者にも山の好きな人はいる。A A C Kと山岳部の共催する講演会なら引き受けてもくれよう。

講演会場は、京大だけでなく、全国各地にある関係諸施設を利用すればよい。西堀榮三郎記念探検の殿堂も講演には好都合な場所だ。この、原稿を書いているときに、西堀榮三郎生誕百年記念行事が、上記殿堂の主催で行われることを知った。A A C Kにとって強力な後押しであり、ありがたいと思う。

講演会には、講師だけでなく、会員や山岳部員も参加し、できれば関連しての簡単な登山でもすれば、人と人の繋がりもできてもっと効果があるろう。感受性の強い中学生に、京大入学の情熱を燃やしてもらおう。

講演を聴きに来てくれた中学生に『将来の夢』を尋ねてみると、きつとその中に我々が取り入れたい『夢』があるだろう。中学生の発想は実に豊かだ。中学生は、専門家が即答できないような素晴らしい質問をすることがある。質問の中にA A C Kが求める『夢』の種があるかも知れない。中学生向けの講演をしたとき、そのような意外な幸運にめぐり合わせることも、ひそかに期待したい。

いくら講演をしても、問題の『夢』の提案が出なければ、骨折損であるという議論はしたくない。なぜなら、A A C Kはこれまで社会のお世話になり活動してきたのだから、講演会は、支援してくれた社会への恩返しでもあり、十分に意義がある。

C2 若者を集めよう

『ニューズレターを京大山岳部へ』

北村 泰一（理地物 一九五四卒）
松林 公蔵（医医 一九七七卒）

筆者達も、編集者で実行可能な、ささや

【特別寄稿】

日本山岳会入会当時の思い出

社団法人日本山岳会副会長

芳賀 孝郎(学習院 政経 一九五八卒)

かな若者集め対策の一つを考えた。それは、京大山岳部の現役が、AACKのことを知る機会を少しでも増そうと、木村新会長の許可を得て、このニュースレターの何部かを山岳部へ寄贈することである。このニュースレターを山岳部の若いOBや現部員に読んで欲しい。そしてAACKが何を行おうとしているのかを知って欲しい。彼らとわれわれの意見が食い違うこともあるから、反論があったら、どんどんニュースレターに投稿して欲しい、との願いをこめて。このニュースレターを誰に配給するかは山岳部に任せてある。

幸い事務局もこのことに賛成してくれて、過去に遡り、今期(二〇〇一年十一月号#二十二より。北村・上田・松林の編集になってから)のニュースレターから山岳部へ贈送されることになった。若いOBや現役山岳部員がこれを見て、価値がないと判断すればそれは仕方がないけれど、AACKの今の苦悩と努力を知ってくれたら、部員の中には興味をもってくれる若者が出るかもしれない、という淡い希望をもって。

〔後記〕 筆者達は、このニュースレターを京大山岳部のみならず、京大探検部へも贈送したいと考えている。探検部創設時の何人かがAACKの現会員であり、そもそも山岳部と探検部は同根であると思うからである。これは関係者と相談して近い将来実行したいと考えている。

加藤泰安先輩に連れられて、私をはじめて日本山岳会のルームを訪れたのは、一九五六年マナスル初登頂の翌年五月であった。お茶の水のルームは木造の建物であった。奥の方を見ると木のチェアが数個あり、そこで談笑している数人の会員が見えた。その中の一人が浦松佐美太郎氏であった。私は、泰安先輩に「あの方は浦松佐美太郎さんですね」と尋ねた。すると「お前は何故浦松氏を知っているのか」と逆に聞かれた。

「一九五三年エヴェレスト初登頂のメンバーであるノイスのサウスコルを、浦松氏が翻訳した本を読みました。登山中のノイス自身を含めた隊員の心境描写に感激しました」と私は答えた。

「浦松氏は大正十年頃欧州に滞在してアルプスを登山した連中のひとりである。今尚当時のアルプス登山の話をしているサロン登山家である」と、サロン登山家の意味を私に説いている泰安先輩の前に、松方三郎氏が突然現れた。

松方氏は、「泰安、お前は今学生に向かっ

てサロン登山家云々と言っていたようだが、どのような話を話したか」と聞かれた。「特に、サロン登山家について話はお済みせんが：」といささか慌て気味の泰安先輩に向かって、松方大先輩は「泰安はジョン・ラスキンについては、良く知っているはずである。まだサロン登山家云々と言っているようでは、泰安、君はいつまでも成長していないな」と説教がはじまった。そして続けて「先日、神田の古本屋で学習院の資料を見つけた。その中に泰安、君の成績表があったんだよ。今度その成績表を山岳会で発表したいものだ」と言われた。さすがの泰安先輩も「それはご勘弁願います。」と頭を下げられた。私は、尊敬している泰安先輩をいじめる松方大先輩を憎らしく思うと共に、日本山岳会は恐ろしいところと思ったのである。

松方氏が立ち去った後、私は恐る恐る「ラスキンと云う方はどのような人物ですか」と聞いた。泰安先輩は「ラスキンを知らない者は山岳会に入る資格がない。直ぐに帰って勉強して出直して来い」と強い口調で、今度は私への説教が始まった。困り果てた私の顔を見て、少々ヒントを与えてやると言われた。「お前は、漱石の坊ちゃんを読んだ事があるか。その中にターナーの松が出てくるだろう」「ターナーの松は知りません」と答えると、内容をよく理解して本を読んでいないと、今度は本の読み方の指導を受けた。

私は、英国の風景画家ターナーに関係していることを確認して、二週間後にラスキンの調査をして報告をしますと約束した。

私は、二週間後に泰安先輩に次のような報告をした。

ジョン・ラスキンは、英国の絵画評論家である。絵画の伝統である宗教画・人物画・静物画の流れのなかで、ラスキンは、自然美の風景を描いたターナーを「近世絵画論」で高く評価した。そして彼は、登山活動は全くしなかったが彼の文章と絵は英国人達をアルプスに誘った。その登山への影響力の実績により一八六九年、栄光の英国山岳会の会員に推薦された。

日本アルプスの開拓者ウエストンもラスキンの影響を受けていた。彼の著書「日本アルプス 登山と探検」で、日本の山はスイスアルプスに比べ高くはないがその山なみの美しさ、荘厳な森林、神秘的な渓谷についての彼の表現は、ラスキンの自然美の評論にもとづくものであると云われている。

日本では、志賀重昂がラスキンの近世絵画論を参考にして一八九四年「日本風景論」を発表した。この本は日本の風景が世界に類のない美しさを持っている事を語る地理書であり、自然美を求めての旅と登山を勧める本でもある。

一九〇五年日本山岳会の創立に関係した小島烏水・岡野金次郎・高頭仁兵衛等もこの本を愛読し、大きな影響を受けた。志賀重昂も地理学者として日本の多くの地域を

見て歩いたが、ラスキンと同じく登山をした記録はない。しかし後日ラスキン同様彼の文章が、登山奨励に多いに役立った功績で日本山岳会の名誉会員に推薦された。

このことから、私は英国山岳会も日本山岳会も自然や山についての優れた研究者ならば、登山実績がなくとも会員として受け入れる気風があることを知った。

泰安氏への報告の最後に、私は松方氏が、泰安先輩に「ラスキンのことは知っているはずだろう」と云われた意味がようやく理解出来ましたと報告すると、「生意気なこと云うな」との一言がかえってきた。

上記の調査報告で評価されたのか、泰安先輩の推薦により翌年の四月京都大学学士山岳会チヨゴリザ遠征隊に参加する幸運に恵まれた。喜んでいた私に、泰安先輩からの連絡で、隊員の最終面接は、松方三郎氏が行うので共同通信社へ行くように云われた。

松方氏の泰安先輩への説教を実際に見ているので、私は恐ろしさに全身緊張で固まり、心臓の鼓動を抑えて社長室に入った。

一、英語語学力のテスト 二、登山技術のテスト 三、将来のリーダーとしてのテスト
ト
の面接があった。

語学力は、先輩が良くないので最初から期待してないと云われた。他の項目ではかろうじてパスした。

一九五七年は、英国山岳会（A C）百周年

年の年であった。日本から十一月六日のA C百周年記念晩餐会に楨氏と松方氏が出席した。私は、松方先輩のA C百周年についてのお話を聞く機会に恵まれた。その時の感動が今尚記憶している。

A C会長サー・ジョン・ハントは、挨拶の中で遠い日本から参加した楨氏と松方氏に特別の歓迎と感謝の言葉を述べられた。A C会員の他に二十数ヶ国の山岳会代表も参列していた。ハント会長の客としてシェールパ・テンジンの顔もあった。総数四百名におよぶ男ばかり会で賑やかであった。A Cは、その当時女性会員は認めていなかったばかりか、正式の集会にも夫人同伴はなかったのである。

松方氏の印象に残ったことは、ヒマラヤのパイオニアの一人である長老トム・ロングスタッフ（当時八十二歳）がA C創立五十周年記念に出席し、A C会長も務め今回百周年にも元気で出席していることであった。彼は、楨氏と松方氏に対して親切に話をかけてくれた。ロングスタッフのA C入会推薦者は、日本でお馴染みのウエストン師であることが特に面白い。彼の最初のヒマラヤ遠征は、一九〇五年（J A C創立年）ガルワールヒマラヤ・ナンダコート（二六、八六一m）の六、五四〇mまで登り、ナンダヴィを偵察した。

一九〇七年六月A C五〇周年記念ヒマラヤ遠征では、トリスル一峯（七、一一〇m）に初登頂した。これは、七、千m峯登頂の

世界最初の記録であった。ナンダコートは、ご存じ通り一九三六年掘田隊長の率いる立隊隊による、日本人が初登頂したヒマラヤの山である。ロングスタッフは、日本といろいろと縁のある登山家であった。

もう一つは、カナディアロツキーマウテンガイドブックの著者ソーリントンに会ったことである。ソーリントンは、当時カナディアンロッキーマウテンの未登峰として残された彼自身も登りたいと熱望していたMEアルバータを彼とパーマーのガイドブックで世界に紹介した。

一九二五年日本隊がMEアルバータを目指したのは、そもそも彼のガイドブックではじめてその山容に接し、その難関を克服する気になったという経緯がある。楨氏に話をかけてきて、「ガイドブックにMEアルバータを紹介したことが、今でも残念に思っています」と云ってアルバータ登頂を祝福してくれたことも愉快である。

またこの会でアメリカカ山岳会オバーリン会長（一九四八年アルバータ第二登頂者）は、楨氏とはじめてお会いし、堅い握手をかわした。

楨氏は、帰路三十年ぶりにスイスに立寄った。プラバンド氏をはじめ多くの友人に会い、歓迎された。その中にはアルバータの仲間がいた。フリーレル（八十三歳）は、昔と変わらず元気であった。コーレルとウエバーは、立派な紳士になっていたと報告されている。一九五八年三月日本山岳会に入会

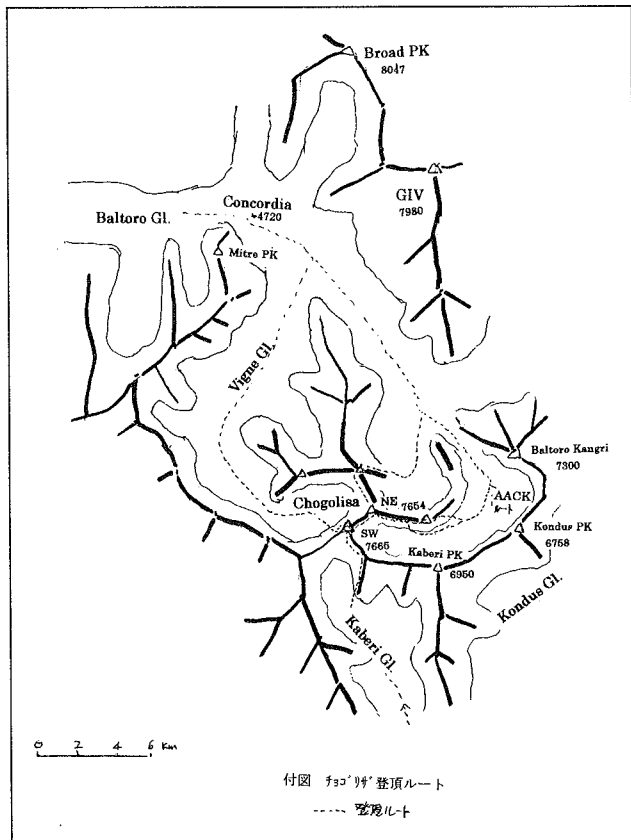
し、五月平井一正氏共にチョゴリザに向けて神戸港を出発した。諸先輩の指導は厳しくもあったが、楽しくもあった。そして有難いものであったと懐かしく思い出される。

【回想の山々】

チョゴリザその後 — いままでどのくらい登られているか —

平井 一正（一九五四卒）

AACKはいままで十三座のヒマラヤの初登頂に成功してきた（AACKホームページ参照）。特にその最初である一九五八年のチョゴリザ初登頂成功の意義は、いま思うと計り知れないくらい大きい。今日では信じられないほどの重量と決していいとは言えない質の装備、食料と、高山病に対する乏しい知識で、よく



ぞ登頂に成功したものとつくづく思う。チョゴリザはきれいな台形をしており、南西峰と北東峰のふたつのピークをもつ。一九五八年にAACKが登頂した北東峰（七、六五四m）と、一九七五年にオーストリア隊の登頂した南西峰（七、六六五m）である。実は一九五八年当時は、一九三九年発行のG.O. Dyhrenfurthの地図があるのみでそこには南西峰は七、五五四mとあり、その高さを疑う者はなかった。北東峰に登頂してはじめて七、五五四mはおかしいということがわかったのである。現に登頂者のひとり藤平さんが、「ここより向こうの方が高いのじゃないか」というような気がした」

北東峰 (NE峰と略、7,654m)

年月日	ルート	国と隊長,隊員数	登頂者	備考
57.6.	E稜 (アブル ツジルート)	オーストリア Diembergerら2人		H.Buhl 雪庇から転落死
58.8.4	E稜 (アブル ツジルート)	日本、桑原武夫ら10人	藤平正夫、平井一正	チョゴリザ初登頂 AACKのヒマラヤ初登頂
79.	同上	秋田県岳連、福田文二 ら10人		7,150mまで
86.6.22 86.6.23	NNE稜	スペイン Sebastian Alvaroら7人	Felix de Pablos Jose Carlos Tamayo (6.22) Ramon Portilla Gregorio Ariz (6.23)	頂上で京大隊の人影を発見 (毎日新聞、88.4.25) De la Torre: C3からハンググライ ダーで滑降 (6.23) 隊員2名7月6日ブロードピーク登 頂、アルパイン形式
86.8.14	SW峰から縦走	英国、Andy Fanshaweら5人	Andy Fanshaweら 5人 (次表参照)	ヴァイン氷河→NW壁→W稜→ SW峰→NE峰→京大ルート下降

と座談会で述べている。その後六八/六九年の Mountain World に A. Bolinder と A. Dyhrenfurth が南西峰の高さを七、六六五 m とし、それが定着して今日に至っている。正確な測量が行われたという話はきいていないので、この数値の根拠を知りたいとも思っている。

いずれにしろチョゴリザはその美しい姿から多くの登山家を惹きつけ、その後も多くの隊が登頂している。ヴァイン (Vigne) 氷河をつめて北西面から西稜にとつつきそこから南西峰を登るルートが容易で、多くの登山隊がこのルートをとっている。AACK の取った東稜からのルートはその後どの隊も登っていない。またオーストリア隊の開拓したカベリ (Kaberl) 氷河から南西峰に至るルートもその困難さのためにほとんど登られていない。残念なことだが、日本隊は AACK 以来どちらのピークにも登っていない。

しかしチョゴリザはいつまでも多くの豊富な話題を提供している。たとえば藤平さんが埋めた日本人形の十八年ぶりの発見、ハンググライダーによる滑降、ふたつのピークを結ぶ縦走、女性による登頂など多くの話題がある。

一九九五年頃からインドとパキスタンの関係が悪くなり、インド軍がシアチェン氷河全域を支配したために、チョゴリザの登山許可が下りなくなった。一九九七年の神奈川ヒマラヤ登山隊によるスキルブルム

(Skilbrum 七、三三〇m) は当初チョゴリザを狙ったものであったが、許可がおりなかったために目標をかえ、結果的に悲劇を招いた(六人死亡)。

一九九八年、私は四十年ぶりにチョゴリザの BC を再訪した。首が痛くなるほどの高みにある頂上を見上げて、当時大きなプレッシャーのかかっていた桑原隊長や加藤副隊長、よきチームワークで結ばれた仲間たち、十二時間にもおよぶラッセルに耐えたあの日の登攀などを思い出し、感慨無量なものがあつた。

この稿の目的は、AACK が登頂に成功してから以後、どのくらいの隊がこの両峰に登頂しているかをしらべた結果である。

抜けているところも多いと思うが、私の調べた範囲をまとめて表で示した。追加、訂正などご指摘していただければ幸いです。

参考文献

両峰の高さについては

- 一、平井・チョゴリザ、「世界山岳地図集成」カラコルムヒンズークジュ」学研社 昭和五三年 pp.117-118.
- 二、G. O. Dyhrenfurth: Baltoro, Basel, 一九三九
- 三、F. de Filippi: Karakorum and Western Himalaya, 1911.

- 四、A. Bolinder and A. Dyhrenfurth: Mountain World, 68/69.

チョゴリザ登攀の歴史については

南西峰 (SW峰と略、7,665m)

年月日	ルート	国と隊長、隊員数	登頂者	備考
75.8.2 75.8.4	南面からSW稜を経て SW峰	オーストリア、 E,Koblmueller ら6人	Fred Pressl Gustav Ammerer (8.2) Alois Furtner Hil,mar Sturm (8.4)	7,000mでピワークのあと登頂
76.7.14	ヴァイン氷河→NW面 →SW峰	西ドイツ、J.Vogt ら3人	Vogt単独	ドイツから車で13日かけてピンディへ。 正式な登山許可なし
83.6.14	カベリ氷河からの初登頂ルート	西ドイツ、 Georg.Broig	Georg.Broig Adi Fisher HubertWendlinger	
84.6.10	?	西ドイツ Hans Zebrowski	Hans Zebrowski Alice Zebrowski	女性登頂
84.6.10	ヴァイン氷河→NW壁 →W稜→SW峰	オーストリア、スイス 合同隊、H.Naveら5人	Harald Nave Louis Deuber	
84.7.26	カベリ氷河→S壁→ SW峰	フランス、Christian Blotら7人	Brigitte Aucher (f)* Phillippe Dubois* Jean-MarieGalmiche Eric Monier	*は下山途中雪崩で死亡、あとの二人はスキーで滑降
86.8.14	ヴァイン氷河→NW壁 →W稜→SW峰→NE峰	イギリス Andy Fanshaweら 5人	Andy Fanshawe Simon Lamb Liam Elliot* Hamish Irvine Ultric Jessop	SW峰(8:40 a.m.)からNE峰、E稜7,000m まで1日 *後にブロードピーク7,900mで転落死
87.	ヴァイン氷河→SW峰	フランス、J.E.Heno 6人	?	詳細不明
93.7-9	Fanshawe 隊のルートからSW峰を狙うが失敗	イギリス、 D.Hamilton ら5人		ルートが悪くなっていて6,950mで断念

巖冬期知床山脈初縦走五十周年
回顧記念講演会・登山会報告

五、薬師、雁部編：ヒマラヤ名峰事典、
平凡社 p.479, 1996.
六、J. San Sebastian: Cuand la luna
cambie Fotocromos IAR, p.87.
(八六年スペイン隊の記録本、写真豊富)
七、その他Himalayan Journal, American
Alpine Journal, Alpenverein Jahrbuch, D-
OeAV などを参照

中島 道郎 (医 一 九 五 五 卒)

京大山岳部の昭和二十七年(一九五二)度冬山は、先輩伊藤洋平さんのアジテーションによって、当時日本に唯一残されていた人跡未踏の地・知床山脈を巖冬期に縦走しようということになった。これをわれわれは『知床遠征』と呼んだ。京都から羅臼まで丸三日かかった、それは全く『遠征』であった。

隊員は、隊長 伊藤洋平、副隊長 藤村良、隊員 山口克、杉山喜一、脇坂誠、廣瀬幸治、斎藤惇生、中島道郎、中川潔、平井一正、寺本巖、川瀬裕史の十二名、それに毎日新聞から報道担当で北尾正康、依田孝喜の二名が加わった。実行の中心人物は脇坂で、夏の間に廣瀬と川瀬を連れて現地

の下見を行い、地元との打合せも済ませていた。

山行の第一次計画は、藤村・脇坂・中島の三名が知床岬から主稜線を南下するのを、残りの本隊が合泊から北上して知床岳の北で合流するというもので、昭和二十七年十二月十六日から二十八日までの十三日間にわたる気温マイナス三十度・風速二十米の吹雪とブッシュとの苦闘の末、この知床岬と知床岳間十三軒の踏破に成功した。そのあと第二次計画として、藤村・山口・斎藤は硫黄岳に、廣瀬・中川・平井・寺本は羅臼岳に登頂し、計画は一月九日、大成功裡に終了した。この大成功の裏には、当時の羅臼の村中を挙げてのご支援があった。われわれ隊員は、五十年後の今も感謝の気持ちを忘れていない。そのことを現在の羅臼町の皆さんに知っていて貰いたいと思い、山口・廣瀬・斎藤・寺本・川瀬、それに筆者の六名は、岩坪五郎・酒井敏明・高村泰雄・潮騎安弘・上尾庄一郎の五君の支援を得て、標記『厳冬期知床山脈初縦走五十年回顧記念講演会』を、昨年の平成十四年十月十三日、羅臼小学校多目的ホールにおいて、主催 昭和二十七年京都大学厳冬期知床山脈初縦走隊、羅臼町、羅臼山岳会、毎日新聞社、北海道新聞社でもって開催した。約八十名の参加があった。次いで、翌十四日、羅臼岳を西側の岩尾別から登頂して東の羅臼に降るといふ知床山脈横断『登山会』を催し、十六名が参加した。この催

しの詳細はインターネットのAACKホームページwww.aack.or.jp/で承知されたい。

今回のこの催しが成功裡に終わることが出来たのは、実に、筆者の友人・北海道本別町の林育雄氏、羅臼町の横岩信子庶務課長、涌坂周一郷土資料室長、渡辺憲爾生活・生活環境課長、宮腰實羅臼山岳会副会長、並びにAACKの岩坪・酒井・高村・潮崎・上尾の諸氏の献身的なご支援のお蔭である。末筆ながらここに記して感謝の意を表する。

知床五十年

廣瀬 幸治（一九五三卒）

京大山岳部の知床遠征は一九五二年、つまり昨年はその五十周年にあたる。中島の知床再訪の提案があつて、わたしはすぐにそれに乗った。かつてお世話になった地元の方々の多くはすでに故人であるが、どなたというわけでもなくとにかく羅臼のみなさんに感謝の気持ちをお伝えしたい。それに、登れるかどうか自信はないが、半世紀前に登った山をもう一度訪れてみたい。つまりは、元知床隊員たちのセンチメンタルジャーニーである。

中島が羅臼山岳会と相談のうえつくった計画に、元隊員の六名（山口、中島、斎藤、

廣瀬、寺本、川瀬）のほかに応援団五名（酒井、高村、岩坪、上尾、潮崎）が参加した。現地イベントとして、十月十二日の羅臼小学校の多目的ホールでの「知床からヒマラヤへ」と題する講演会はまずまず好評のようであったし、その夜の羅臼山岳会をはじめ地元のみなさんとの懇親会も大いに盛りあがった。

問題は翌十三日の羅臼岳登山であった。早朝に羅臼温泉をマイクロバスで出発、六時岩尾別登山口から登りはじめたが、予想以上に時間がかかり、登頂後半島を横断して羅臼温泉まで、早い組で十二時間あまり、遅い組は更に三時間を要した。それも羅臼山岳会のみなさんのゆきとどいたサポートなくしてはとても完走できなかったろう。地元の方がたの誠意あふれる献身的なご援助で無事計画を終えることができたのはいいが、五十年前にたいへんお世話になったうえに、今回もまた思いがけずご迷惑をおかけして、ただただ恐縮するばかりである。五十年前の遠征については当時の京大山岳部の部報や日本山岳会の「山岳」に詳しい記録があるので、くりかえすつもりはないが、それらに書かれていないことをひとつだけこの機会に述べておきたい。

一九五二年はマナスル偵察隊が出た年、つまり日本のヒマラヤ元年にあたる。それから半世紀を経て、山自体や登山という人間の行為自体がそれほど変わったわけではないが、登山の社会的な意味はさまざま変わり

である。つまり登山の評価はそのタイミングによる大きい。

知床遠征をおもいついたのは伊藤洋平（ヨッペイ）さんである。彼については批判的な人が多く、私もその一人であるが、当時の京大山岳部の状況とヒマラヤ元年というタイミングで考えると、知床遠征はきわめてすぐれた企画であった。日本国内ではきわめつきのきびしい冬山の体験、遠征登山の運営というわれわれには未知の、しかしヒマラヤには不可欠な部分の疑似体験、それに北方領土で話題性の味付けをして新聞社の後援をとりつけるなど、あれはまさに洋平さんならではの計画である。ただし、結果的に成功といえるなら、それは岬隊のがんばりによるところがきわめておおい。隊長としての洋平さんが隊員にたいへん評判がわるかったのも、いかにも彼らしい。人の評判などはじめから考えもしない人である。遠征が終わってから、わたしは彼にかなり手きびしく文句を言ったことがあるが、彼はわたしの言ったことをいくらかでも理解したように思えなかった。

洋平さんについて、もうすこし書いておきたい。戦後の京大山岳部がなんとか力をつけてきたのには、林一彦さんの誠意と努力によるところが大きい。それがなぜか、途中で洋平さんに入れ替わった。もうお二人とも故人であるし、その間の事情はわからないままである。山で林さんにシゴかれた記憶はあっても、その純粋なお人柄はみ

んなよくわかっていた。その正反対が洋平さんである。故人の悪口は書きにくい、彼には山ではさんごんめんどうをみさせられたうえに、その自分勝手な言動にはみんなうんざりしていた。そんななかで、彼はそれなりの結果を出し、そのうえでいつのまにかA A C Kから消えていった。洋平さんはそういうふしぎな人であった。

いずれにせよ、わたしたちの世代にとつては、知床はまさにそれからの半世紀の「知床からヒマラヤへ」の原点であった。それなら次の半世紀への原点は何かといわれれば、もうわれわれにはそれについて発言する能力はない。残念ながら、あるいは申しわけないことながら、知床からの半世紀はいい時代であったという老人らしいコメントでこの駄文を終わるしかない。

【理事会議事録】

日 時 平成十五（二〇〇三）年三月十日

六日（日）午後一時～午後三時

場 所 京都市左京区田中関田町 京大

会館二一七号室

出席理事

上尾庄一郎、田中二郎、福寛義

宏、横山宏太郎、牛田一成、吹

田啓一郎、山田和人、竹田晋也

委任状によるもの 西山孝、上田豊、松沢

哲郎、松林公蔵、中川潔、人見
五郎、高尾文雄、清水浩 以上
九名
欠席理事 なし
議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十五（二〇〇三）年度事業計画について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十五年度事業計画に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十五（二〇〇三）年度収支予算について

理事竹田晋也によって作成された平成十五年度収支予算に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

【理事会議事録】

日 時 平成十五（二〇〇三）年五月二

五日（日）午後一時～午後二時

三十分

場 所 京都市左京区吉田河原町 京大

会館

出席理事

上尾庄一郎、田中二郎、福寫義宏、上田豊、横山宏太郎、松林公蔵、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也 以上十名

委任状によるもの 西山孝、松沢哲郎、中

川潔、人見五郎、清水浩 以上五名

欠席理事 牛田一成 以上一名

議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十四（二〇〇二）年度事業報告について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十四年度事業報告について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十四（二〇〇二）年度収支決算について

理事竹田晋也によって作成された平成十四年度収支決算について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 役員の変更について

議長より任期満了に伴う本会役員の変更について、下記の通り改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事 木村雅昭（会長）、松林公蔵（副会長）、田中昌二郎、福寫義宏、上田豊、横山

宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、清水浩 以上十六名
監事 平井一正、伊藤宏範 以上二名

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

【総会議事録】

日時 平成十五年五月二十五日（日）

午後三時～午後四時三十分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大

会館

会員総数 二八一名

出席者数 一八二名（うち委任状出席一四五名）

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）上尾庄一郎が定款の規定により議長となり、議事録署名人に竹田晋也、吹田啓一郎の両名を選出した後、下記議案の審議に入る。

第一号議案 平成十四年度事業報告および

収支決算について

担当の者より平成十四年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成十五年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案 役員の変更について

議長より任期満了に伴う本会役員の変更について、下記の通り改選案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事 木村雅昭（会長）、松林公蔵（副会長）、田中昌二郎、福寫義宏、上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、清水浩 以上十六名
監事 平井一正、伊藤宏範 以上二名

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三十分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

お知らせ

第二回南極半島ツアーのお知らせ

●二〇〇四年一月十九日から二月四日、十七日間

●スグローバル・ユース・ビューロー主 25

催、北村泰一添乗。

電話 03-3505-0055

ファクス 03-3505-0095

パンフレット請求は直接会社へ。北村の関係者であることを明示すること。何かよいことがあるかも知れない。

●価格、九九万六千円（普通室）から一八二万円（最高室）。百名募集。

●部屋は七段階あり、百万円弱の部屋は、もう予約で満室とか（キャンセル待ち）

●定員ほぼ一〇〇名。現在は七〇名以上、決心はあとでもよいが早い方がよい。

●見どころ

今回は、昨年とは会社も航路も異なりま
す。だが、昨年果たせなかった、南極探
検家シャクルトンの跡を訪ねます（エレ
ファント島）。何故シャクルトンにあんな
勇気が出来たかには秘密があると考えま
す。それは、シャクルトンに先立つこと
十年前、オット・ノルデンシヨルト隊の
経験です。今回、そのオット・ノルデン
シヨルト隊の跡をも訪ね（スノーヒル島
とポーレー島）、シャクルトンの信じられ
ない冒険の謎に迫りたいと考えます（北
村の極地探検史研究による）。

編集後記

この号で私達の編集を終わる。次号から、田

中昌二郎氏の編集となる。

私達が編集を始めた時、任期内に特集『A A C Kの今後ゆく道』などに決着がつくと思ってい
た。だが、決着どころか、今号になってやっと今
までとは異質の生き方の『垂直行動から、水平
行動』を考えることも一考かと……（木村新会
長挨拶）とか、『未踏峰に挑むほかにA A C Kに
はもう一つの衝動があった。未知の領域への探險
である……（中略）。当然の帰結として、地球外
にパイオニア行動の場を求めるべきであると考え
ている』（梅棹論文）とか、『A A C K進化論』
（北村論文）が出てきた。

『A A C Kの行く道、A シリーズ』は本特集に
掲載されたのが十七案、批判文Bシリーズは書き
にくいかわずかに二件または三件、それもA シ
リーズの批判文ではなく、A A C Kの現状に対し
ての啓蒙文である。自由にモノが言えるのがA A
C Kの長所だと、若い時からそう思っている。新
しいC シリーズ（若者を獲得しようシリーズ）は、
今号から滑りだした。A シリーズの批判文は今後
に待たねばならないのかも知れない。A、B、C
シリーズに対する投稿を今後、そして今後も期
待したい。

新しいA A C Kニュースレターにこの方針が
含まれるかどうかはわからない。編集方針は編集
長に任されているからだ。だが、特集であろうと
あるまいと、A、B、Cシリーズへはつづいて投
稿してほしい。ものを言わないのは、その考えが
ないのと同じだ。

現在はA A C Kの危急存亡の時である（新会
長挨拶）。その危機意識を持つてほしい。A A C
Kの『立ち枯れ』は寸前に迫っている。これで
良いのかA A C K、その2で述べられているよ

うに、この十二年間に（一九九一卒以来）、京大
山岳部の若者が入会したのは2人にとどまる（二
〇〇一年笹ヶ峰名簿）。その間、現役部員が二十
四名も卒業しているにも拘わらず、である。

A A C K会員は、この現実を直視し危機感を持
つてほしい。なるようになる……という生
き方は、やることをやっつてから”の後に達する
境地であると思う。努力もせずに、そんな生き方
をするのは、一見『何かを悟った』ように見える
が、本当はそれを本気で考えたことがないことを
意味すると思う。

筆者のこうした考えは、実は筆者独自のもの
ではない。A A C Kの元祖の一人、西堀栄三郎氏
と南極で一年を過ごす間に、西堀流生き方に共鳴
したからである。だから、少なくとも西堀氏はこ
の考え方に同調してくださるものと思う。この生
き方は、ごく一般的なものなので、これに同調し
てくださる方も多いと思う。賛成なら、A A C K
が枯死する前に、生きるための努力を一緒にしよ
うではありませんか。

それでは皆さんご機嫌よう。（北村泰一）

次号の原稿締切は十二月十日、発行は一月末の予定です。

編集委員 北村泰一、上田 豊、松林公藏

発行日 二〇〇三年九月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒612-0022 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所